



第21回 最近の消化器外科手術について

外科 高原 善博

医学およびテクノロジーの発展は日進月歩であり、我々が専門としている消化器外科領域においても例外ではなく常に変化を続けています。当院消化器外科で扱っている疾患臓器（手術）は胃・十二指腸・小腸・大腸・肝臓・膵臓・胆嚢・脾臓・腹膜疾患（ヘルニア）と多岐に渡りますが、そのほとんどの手術は腹腔鏡という機械を用いて行うようになりました。ちなみに昨年当院で行われた外科手術のうち77%は腹腔鏡を用いた手術でした。

腹腔鏡手術とはお腹に小さな傷を数カ所あけて行う手術です。まず、最初に小さな傷（大抵の手術の場合、おへそを切ります。1 cm 程度）をあけて、そこから炭酸ガスをいれます。お腹の中はお腹の壁と内臓が一部の隙もなく、くっついているのですが、炭酸ガスでお腹を膨らませることでお腹の壁と内臓の間に空間ができます。その空間に5mm から1cm の小さな傷から挿入できるカメラと細長い機械をいれて手術を行います。したがって、手術はそのほとんどの操作がテレビモニターを見ながら行われます。機械のテクノロジーも素晴らしく、腹腔鏡は肉眼でみるより遥かに細く観察することができます。結果として出血量も少なく傷の痛みも少ないということになります。

外科の手術というと痛いし怖いイメージがあると思います（実際否定はできません）が、私が外科医を始めた20年前と比べると隔世の感があります。当院では導入していませんが、最近ロボット支援下手術というものも日本では急速に普及してきております。テクノロジーの進歩には賛否両論ありますがほとんどの腹腔鏡手術に関しては安全性が確立されており、手術を受ける人の負担は確実に少なくなったと感じています。

